

# 海外散歩

## 憧れのモロッコ

### 7つの世界遺産感動物語10日間 (その2)

前 理雄

(前号からの続き)

●エルフード着

●2月11日 (月)

いよいよ本当に楽しみにしていたサハラ砂漠を見て、感触を楽しむ日だ。

午前6時20分に4WDに分乗してサハラ砂漠に出かけた。

●メルズーガ

約30分で現場に到着して、ラクダに乗る組と徒歩で日の出の見える場所に移動する組に分かれた。私たち夫婦は徒歩組で、娘はラクダ組(約5000円)である。

日本の夜明けと違って、午前8時08分頃の日の出だという。

深い砂のためにサポーターが左手に私、右手に妻を抱えて、一歩一歩かみしめて30分後に目的地に着いた。まだ薄暗い。遠方に娘たちのラクダの列がようやく見える。

旅行案内には、砂漠は冷え込むと書いていたので、思いっきり防寒対策をしたが、以外に暖かく、手袋もいらぬ。耳当てもいらぬ。

砂が靴に入らないように妻と娘はオーバーシューズを準備してきた。(それは役立ったらしい。)私

は、ツッカケの後ろをナイロンのひもでくくった簡素な備えだ。でもこれは必要なかった。砂が入っても短靴で良いと現地に着いて思ったので帰りは短靴にした。確かに大量の砂が靴の中に入るが、本当にきめ細かいサラッとした砂なので、何の問題もなかった。(ただし、天候が温暖で晴れていたから良かっただけなのかもしれない。天候不順ならこうもいかなかったかもしれない。)

みんなが一斉にカメラを向けてサハラの夜明けに酔いしれた(感動した)。

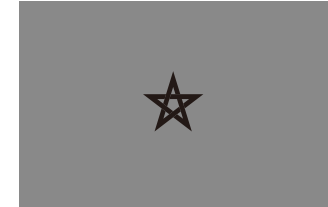
めったに体験できないサハラ砂漠は、一生忘れることはないでしょう。スケールの大きさを写真で表すことは難しいが、見渡す限り、砂の山だ。

砂のきめが小さく、ところによっては、20cmくらい足が砂にめり込んだ。予想外だったのは、赤い砂ということだった。

砂漠見学の後、エルフードに戻り、カスバ街道を西に進んだ。

山脈のすそ野を西に5時間ほど進んだ途中でトドラ溪谷に立ち寄った。

ティネリールの北西に位置する峡谷である。断崖絶壁は、アメリ



カのグランドキャニオンのモロッコ版のような溪谷だ。川の両側にそそり立つ岩壁は、300～400mくらいあって、見るものを圧倒する。ヨーロッパのロッククライマーがたくさん来るそうだ。

ティネリールでは、お土産品店が沢山出ていて、その多くは黒曜石・アンモナイトや三葉虫の化石、中にはサソリの化石などもあった。

しかし、あまりの整った美しさと数の多さに「偽造品？」を疑いたくなった。

外には、革製品や工芸品や果物などを売っていた。

沿道を進むと、川の水が豊富な場所にオアシス(ナツメヤシの林)がある。谷底にパノラマのように広がっている。

ガイドさんが試食したのに触発されてお土産にナツメヤシの箱詰を12個買ったが、珍しいものでもあり、結構おいしいので、いい土産になった。

※ナツメヤシ(棗椰子、学名: Phoenix dactylifera)はヤシ科の常緑高木。果実(デーツ、Date)は北アフリカや中東では主要な食品の1つである。

デーツはイラクやアラブ諸国、



サハラの日の出



娘は、民族衣装を着せてもらって、ラクダ引きのおじさんと記念写真



西は北アフリカのモロッコまでの広い地域で、古くから重要な食物となっている。イスラム諸国では、デーツと牛乳は伝統的にラマダーン期間中の日没後に最初に食べるそうだ。

さらに進むと、地下水道跡があった。

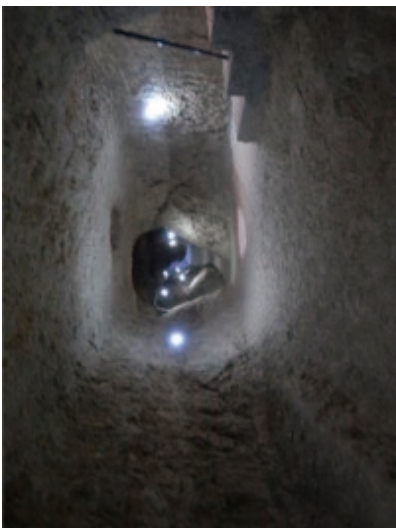
この地域のご先祖様の努力に偉大さを感じた。高アトラス山脈から砂漠の下の粘土層にトンネルを掘って500kmにも及ぶ大水道が作られていました。中に入ると縦横各5mはある大きなものでした。

バスは、山脈と山脈の間をひたすら西に走って、ワルザザードに19時頃到着した。いくつかの途中下車はあるものの、朝9時に出発して夜7時までの長旅であった。

## ●2月12日 (火)

朝食後 ワルザザードのホテルを出発して、17世紀の豪族が所有していた有名な「タウリルトカスバ」を道路を挟んで見学した。

やや遠方のためスケールの大きさを実感できなかったが、日本というところの「土壁(土レンガ?)でできたお城」でした。



マラケシュの司令官やフランス軍が重用した部族の首長などが住んでいたという。

ワルザザード

次の観光スポットは、映画の街、ハリウッド映画のスタジオがあり、世界遺産の「アイト・ベン・ハッドゥ」でした。

ワルザザードの街から西方にあって、クラウイ家が居住していたカスバで現在は、映画のロケやホテル・レストランとして利用されているカスバだそうだ。

このカスバは、日干しレンガ造りの要塞だ。丘の斜面を利用して立体的に建てられた要塞で、重厚な門などが壮観でモロッコで一番美しい?村と讃えられるという。

アメリカのクリントン女史の妹がこの近くに住み、寡婦支援事業をしている現場も見学した。

次にアルガンオイルのお店に寄った。

※ Wikipedia

※アルガンオイルとは、モロッコにのみ生育するアルガンの樹の実から採油された希少なオイルです。アルガンオイルは「モロッコの黄金」と呼ばれ美や健康に役立てられており、その効果について



17世紀の「タウリルトカスバ」



トドラ渓谷

の研究も進められているそうだ。

ここでは、女性たちが、カヤの実のように固い皮で覆われた実を石で皮を砕いて、実を取り出し、それを石臼で引いてオイルを絞り出していた。

添説によると、100kgの実から1リットルのオイルしか採れないという貴重なものだそうだ。

ベルベル人(先住民族)の民間治療薬として昔から使われていたものようだ。

妻や娘は少し買ったようだが、帰国して使ってみると大層良いらしい。外に「バラのハンドクリーム」をお土産に買って来たという。

ここには、サボテンオイル(アンチエイジングオイル)もあった。(※モロッコ原産の幻のサボテンオイルは、豊富なビタミンEを含有しています。)

旅は、高アトラス山脈の標高2,260mのティシュカ峠を超えて、マラケシュに向かっている。

エルフードを出てからは、ブー



アイト・ベン・ハッドゥ



寡婦たちの刺繍現場

ゲンビリアやキョウチクトウの花が咲き、アーモンドの花（梅・桃・桜に似た花）が満開だった。

アーモンドは1～2月に花が咲き、8～10月に収穫する。木の下にシートを敷き、機械で枝をゆすって収穫するので「アーモンドシャワー」というそうだ。

沿道も次第に肥沃そうな地質に代わり、いろいろな野菜や果物が取れそうな風景に変わりつつありますが、北の方とはまだ違って、礫の多い土質に変わらない。

※添説：果樹園では、アーモンド、ピスタチオ、イチゴ、リンゴ、オレンジ、くるみ、ブドウ、アンズ（プラム）、ナッツなどを栽培する、日本由来のイチジク、柿も栽培する（果樹ではないがアジサイ、櫻も同様である。）国土が広く、気候は、温暖なために何でもできるのだそうだ。

マラケシュに到着して夕刻のジャマ・エル・フナ広場に行った。

今までとは全く違う賑わいで、アラブ系の人、ヨーロッパ系の人、観光客などで大変な賑わいだった。

広場では、コブラやアオダイショウ似の大きな蛇を数匹見せていた。蛇使いも何組かいたし、大道



クトゥビアの塔



アルガンの実を砕き石臼で引いている女性達

芸人が大勢の人を集めて芸を披露したり、笛や太鼓で歌を歌う人たちもいる。

この人たちは、カメラを向けるとすぐに飛んできてチップを要求するので、カメラ映像はありません。

広場の半分開らひは、テントを張った店が朝市のようにたくさん並び、土産品や果物・果物ジュースを売っている。

広場には馬車も入ってくるので、うっかりすると馬車事故にも遭いそうで、気が抜けない。夕刻でもあり、事件に巻き込まれないようにカフェ・レストランの屋上から広場の様子を見た。

## ●2月13日（水）

・マラケシュ

午前中にマラケシュのメディナ（旧市街：世界遺産、）を見学して、クトゥビアの塔の見学に行った。

※モロッコ第2の都市マラケシュにある、高さ69m、幅12.8mのミナレット（塔）。12世紀に建造された。マラケシュのシンボルと



いわれている。4面それぞれに異なる装飾をもつムーア様式建築は究極の美とか。

この広場から大西洋が見渡すことができ、海岸線は一見オーストラリアのゴールドコーストにも似た雰囲気があった。

翌日、再びジャマ・エル・フナ広場に行ったが、昼間は人出が少なく穏やかな広場になっていた。

旅行日程の調整？のようなひと時でした。

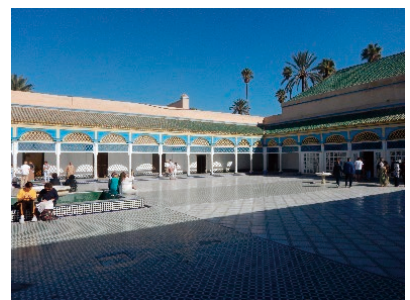
次は、マジョレル庭園の見学だ。

この庭園はフランス人マジョレルが、1922年に作ったものだが、没後デザイナーのイヴ・サン＝ローランの奥さんが気に入って住んだところとして有名になったらしい。

庭園内には、熱帯植物（ヤシや大きなサボテン、ブーゲンビリア等）が所狭しと植えられて見事な景観を作っている。

なお、竹も植わっていたが、タケノコの皮が日本の倍はありそうな大きなものなので驚いた。

※ Wikipedia：イヴ・サン＝ローランは、フランス領アルジェリア出身のファッションデザイナー。



バヒヤ宮殿の中庭



そして、イヴの名を冠したファッションブランドで有名。ココ・シャネル、クリスチャン・ディオール、ポール・ポワレらとともに20世紀のフランスのファッション業界をリードした。

その後、バヒヤ宮殿を訪ねた。※バヒヤ宮殿は、モロッコのアルハンブラ宮殿とも言われ、広大な庭園に4人の妃と24人の側室の部屋を配した豪華な建物です。

彩り鮮やかなタイルの床や壁は見事です。

この宮殿を出て馬車の乗車体験をした。

馬はよく訓練されており、急に走ったり、暴れるようなことはなく、人や車を上手にかき分けて進んでくれた。乗り心地は、結構、快適だ。

帰路、スーパーマーケット・カルフル）に立ち寄り、土産品をゲットした。

ホテルに帰った後も個人的な買い物（孫への土産や土産用のワイン・と最後の晩餐としてのワインを調達するために再度カルフルに出かけた。

## ●2月14日（木）

・カサブランカ

朝食後、3時間30分かけてカサブランカ市内に戻ってきた。

到着後、市内見学としてハッサン2世モスクを見学した。

※モロッコ北部の都市カサブランカにあるイスラム寺院。市街北西部に位置し、大西洋に臨む。国王ハッサン2世の発案により1993年に建造。尖塔（ミナレット）の高さは200メートル。

最後に現地案内人（ガイドと運



転手・助手）にお別れをして、モロッコ全土を大急ぎで見て回る快適な旅行を終了した。

## 帰国の途

カサブランカ空港発15時05分の飛行機にて乗り継ぎ空港であるドバイに飛び立った。

約7時間25分間飛行してドバイに到着した。

## ●2月15日（金）

ドバイに午前1時30分に到着して2時55分にはドバイを発って成田へ向かった。

成田へは、17時25分に到着して、検疫、入国審査、スーツケースの受取後解散になった。

以上、全行程をおおよそ記述したが、ホテル事情・食事情・トイレ事情については、あえて記述しなかった。

しかし、折角なので、少し説明するとホテルは、ドアノブが壊れていたり、浴槽の栓がなかったり、お湯が出なかったり、電話が通じなかったりするところもあった。

食事は、モロッコパンと野菜中心で肉や卵・乳製品はあるが、それらを煮たり・焼いたり・蒸したりして香辛料とオリーブオイルが入った独特の味がする健康料理だ。

トイレは、一般的には、金隠しのない和式トイレにバケツがあって汚物を流すやり方である。利用料は、10～20ディラハム（120円～240円）が必要だ。

なお、枕銭は、義務ではないが10～20ディラハム（120～240円）が一般的だそうだ。

いずれにしても、文化の違いや

国民性の違いがあることを知ることが大事だ。

日本人の社会生活とはややかけ離れているものの、それなりに一生懸命生きているモロッコの人達にいろいろと珍しいものを見せていただいて感動することが多かった。

しかも安全に10日間を過ごすことができたことを感謝したい。

## 3. まとめ

（モロッコ王国の感想）

- ①侵略され、敗れ続けた国だった（ヨーロッパからもアラブからも侵略された）
- ②気候は温暖で（夏は相当に暑いらしい：2月は案外旅行シーズンかもしれない。）植物は砂漠以外ではよく育つ。
- ③男女とも背が高い（男子トイレの便器が高いこと！）女性は美人でした。サッカーが、熱心に行われているらしい。
- ④自然や気候風土は、地球の縮図のようだった。（アメリカの砂漠・豪州の海岸・ニュージーランドの放牧地・ネパールの民家や生活・スイスの高山・ヨーロッパの文化そしてイスラムの文化と宗教。）
- ⑤素晴らしい伝統工芸品（技術）がある。今後は、科学を駆使して悪条件を克服してほしい。
- ⑥健康的な食生活（パンのほかは野菜・果物と肉・乳製品が中心、酒は飲まない）
- ⑦生活は豊かではないが、国民は人懐っこい。
- ⑧国民の識字率も上がっているそうなので、今後の発展が期待できる。
- ⑨王宮が複数の主要都市の一等地にあって広大な面積があるらしい。民衆との格差が多少気になった。
- ⑩モロッコの体験は、今後いろいろな面で役立つと思う。

（日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照）